

〈2020 年度〉

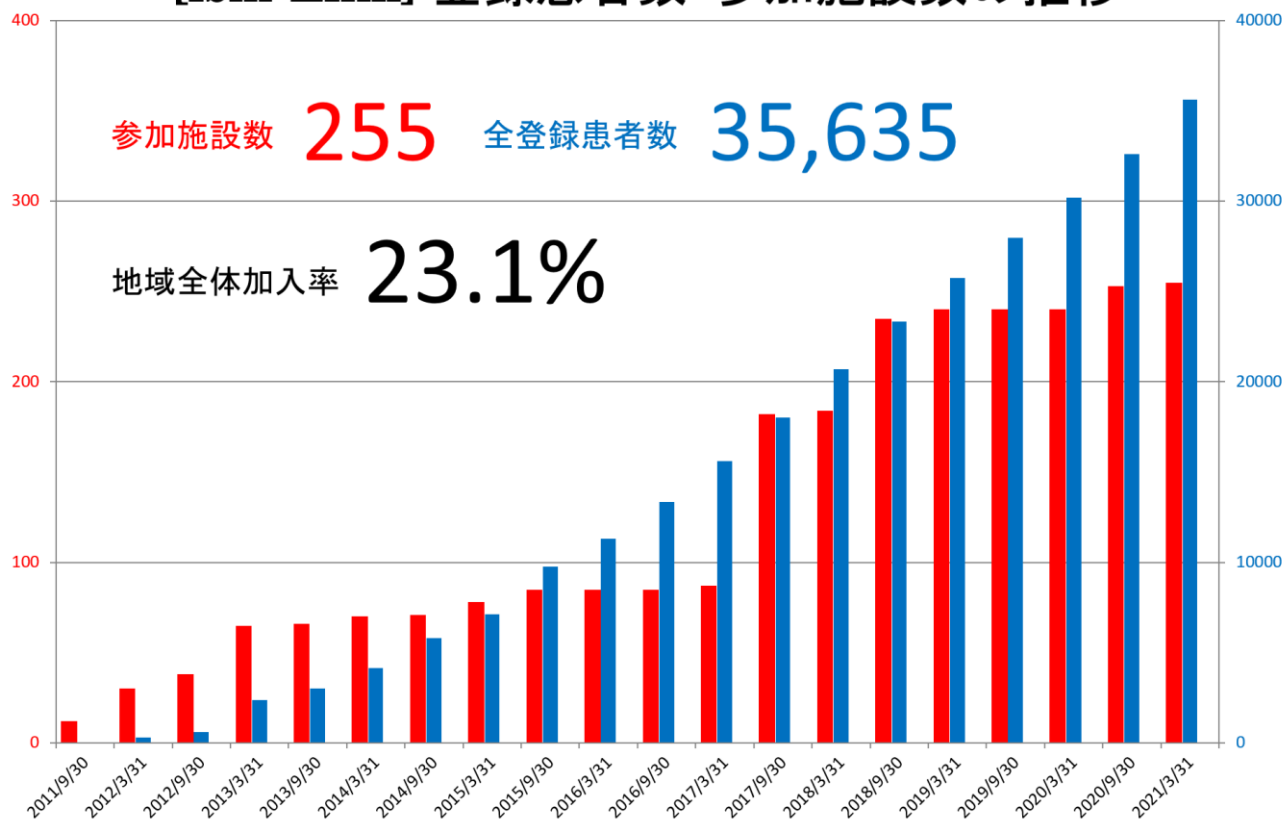
ism-Link の検証

南信州在宅医療・介護連携推進協議会
飯田下伊那診療情報連携システム運営小員会

医療と介護の連携において、円滑な情報共有は重要な課題の一つとなっている。飯田下伊那診療情報連携システム（ism-Link）は、2009年度に導入され、2011年12月に情報開示6病院を中心に運用を開始した。その後、システム更新を機に、2016年4月に南信州広域連合に事務局を設置し、南信州在宅医療・介護連携推進協議会の飯田下伊那診療情報連携システム運営小委員会において運用方法等の検討を行っている。その中で、ism-Linkが当地域の医療・介護連携における「情報インフラ」として適切なシステムであるかどうかを検討するため、定期的にism-Linkの利活用の状況、医療・介護連携における効果等について検証作業を実施している。

	項目	検証に必要な主要データ	詳細
1	基本事項	参加医療・介護関係事業者数	<ul style="list-style-type: none"> ・地域全体の医療・介護関係事業者数把握（資源把握） ・参加事業者数集計（全体/業種別） ・参加率（地域全体/業種別）
2	基本事項	ism-Linkに同意した住民の数	<ul style="list-style-type: none"> ・地域全体の登録患者数
3	病病連携	病院間連携での閲覧状況	<ul style="list-style-type: none"> ・病院間アクセス件数 ・地域連携パスでのism-Link登録患者数 ・その他転院時におけるism-Link登録患者数
4	病診連携	病診間連携での閲覧状況	<ul style="list-style-type: none"> ・病⇒診アクセス件数 ・診⇒病アクセス件数 ・がん地域連携パスでのism-Link登録患者数
5	多職種連携	医療介護連携での閲覧状況	<ul style="list-style-type: none"> ・連携シート作成数に対するism-Link登録患者数 ・診病介間アクセス件数
6	情報共有項目	項目別閲覧状況	各項目※1のアクセス件数 ※1 画像・検査・注射・処方・レポート・ファイル・ノート
7	利用者の意見	関係職種向けアンケート調査	利活用における課題を洗い出し、改善に向けた対策を講じるための材料とする。 <ul style="list-style-type: none"> ・2016年度は医師・訪問看護師を対象とする。 ・2017年度以降は、関係する多職種を対象とする。
8	診療報酬算定	算定件数	地域全体の算定件数 <ul style="list-style-type: none"> ・画像・検査情報提供加算 算定件数（200点/30点） ・電子的診療情報評価料 算定件数（30点）

[ism-Link] 登録患者数・参加施設数の推移



施設	地域施設数	参加施設数	参加率
病院	9	9	100%
診療所	105	70	66%
歯科診療所	83	24	29%
調剤薬局	63	61	96%
訪問看護ステーション	13	13	100%
介護関係事業所 (行政含む)	121	78	64%
合計	394	255	64%

検証項目 3～6

(1) アクセス件数の年次推移

図 1 施設別アクセス件数の年次推移

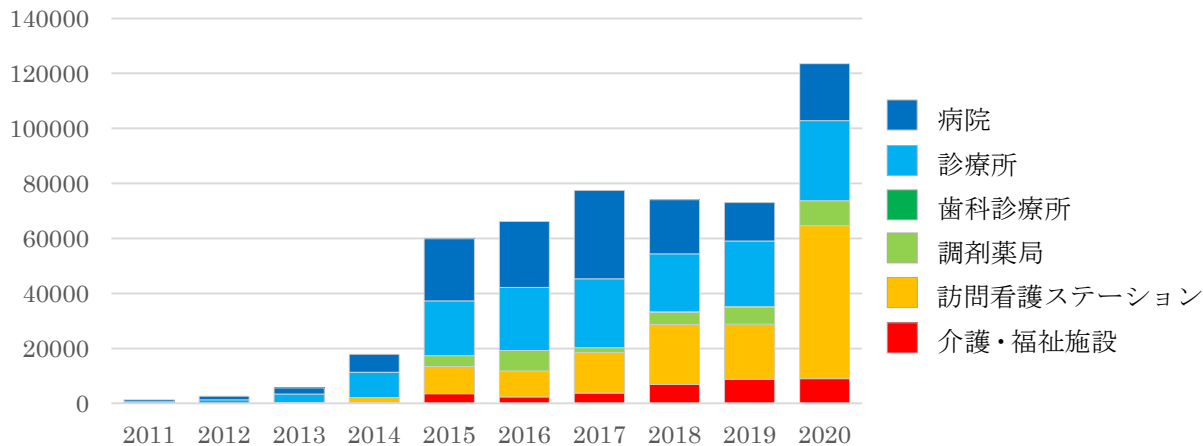


図 2 職種別アクセス件数の年次推移

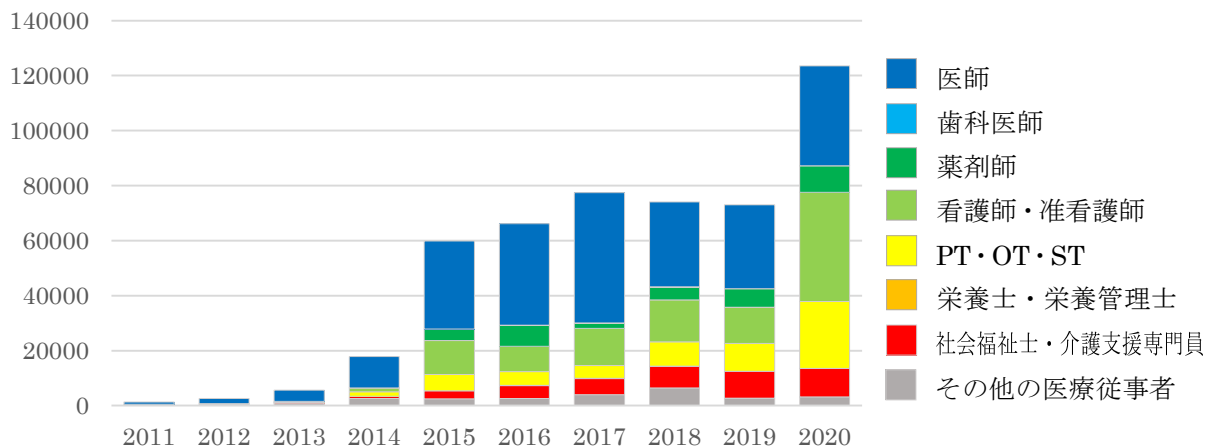
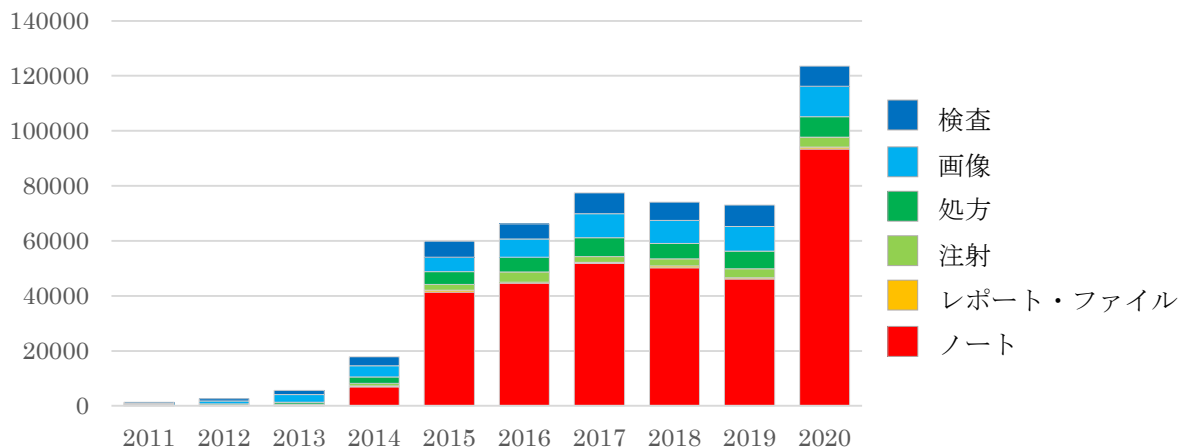


図 3 項目別アクセス件数の年次推移



(2) 施設別のアクセス状況

図4 病院の参照先・参照項目

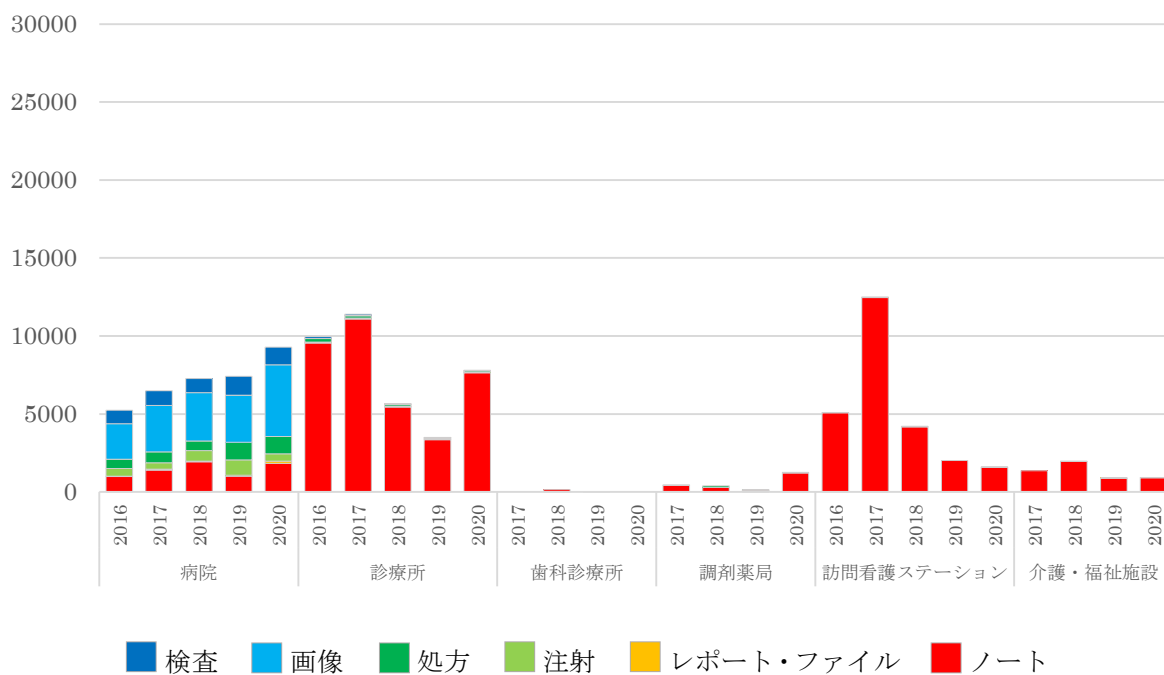


図5 診療所の参照先・参照項目

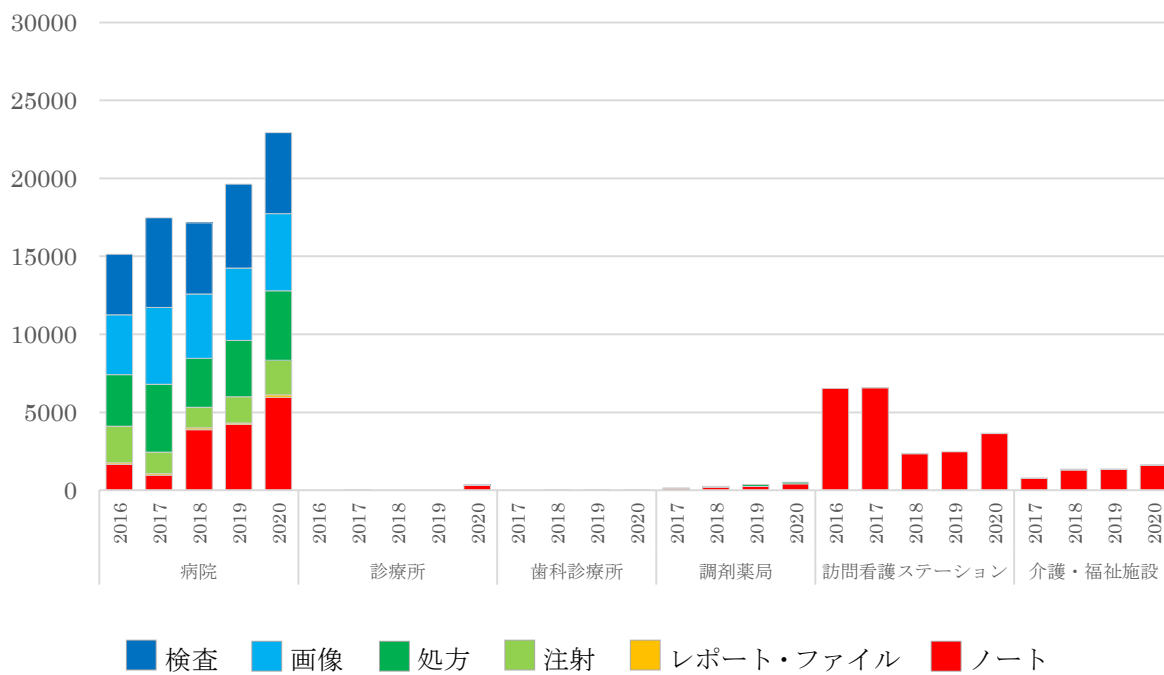


図 6 歯科診療所の参照先・参照項目

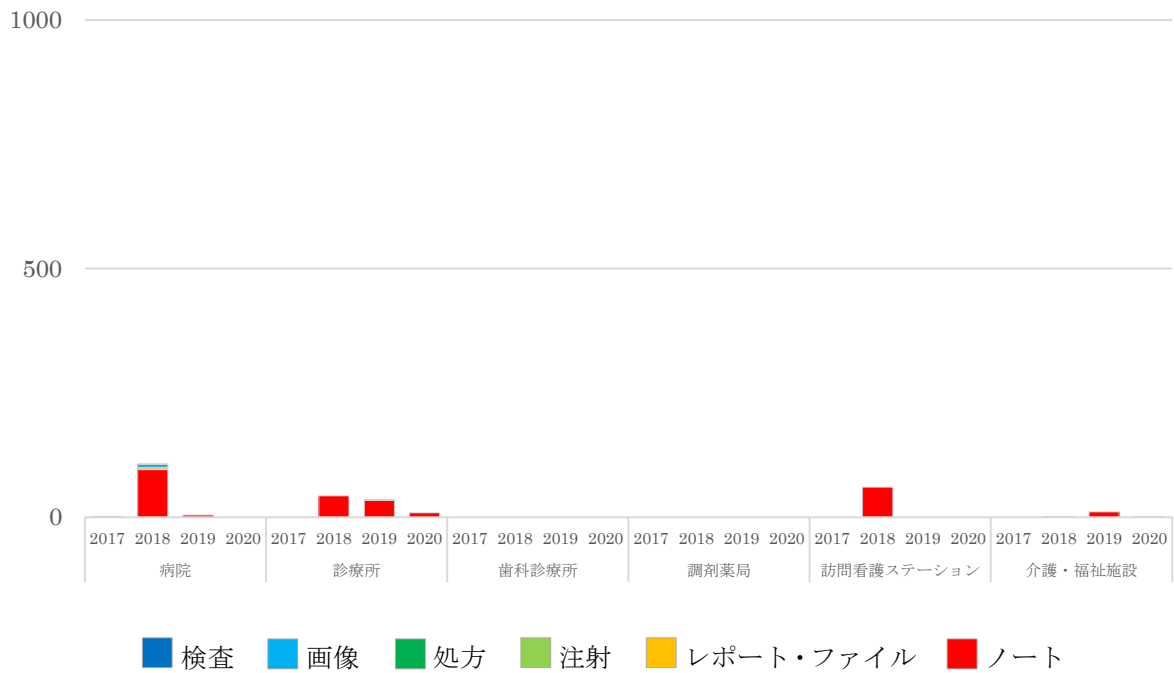


図 7 調剤薬局の参照先・参照項目

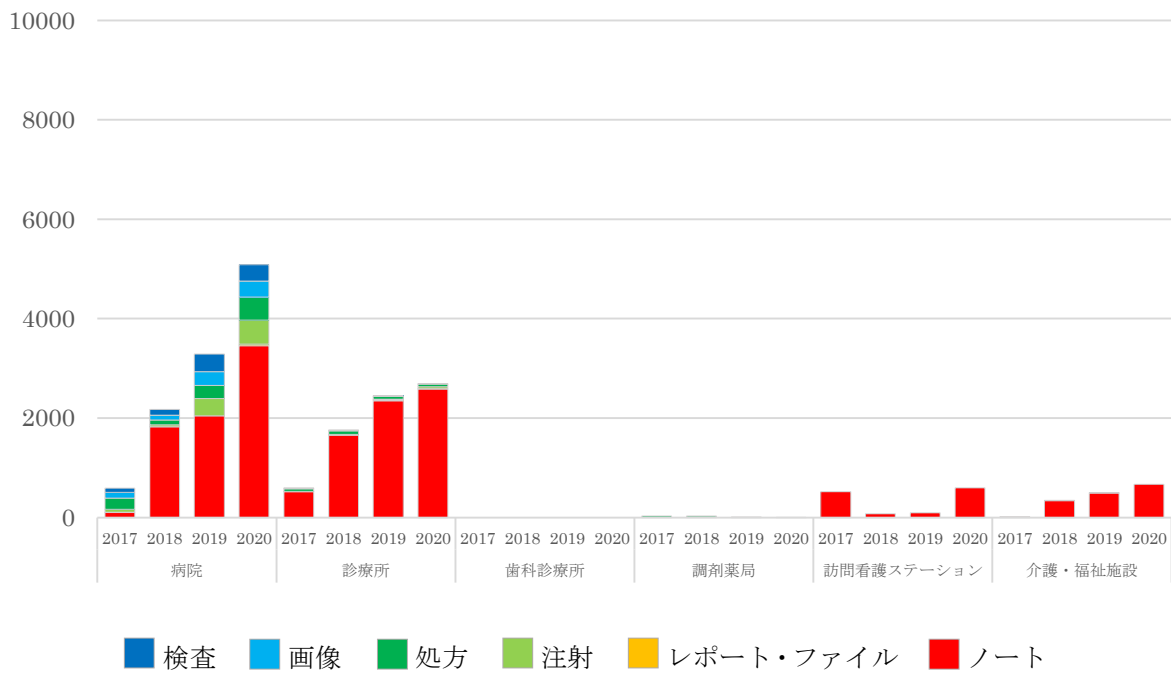


図 8 訪問看護ステーションの参照先・参照項目

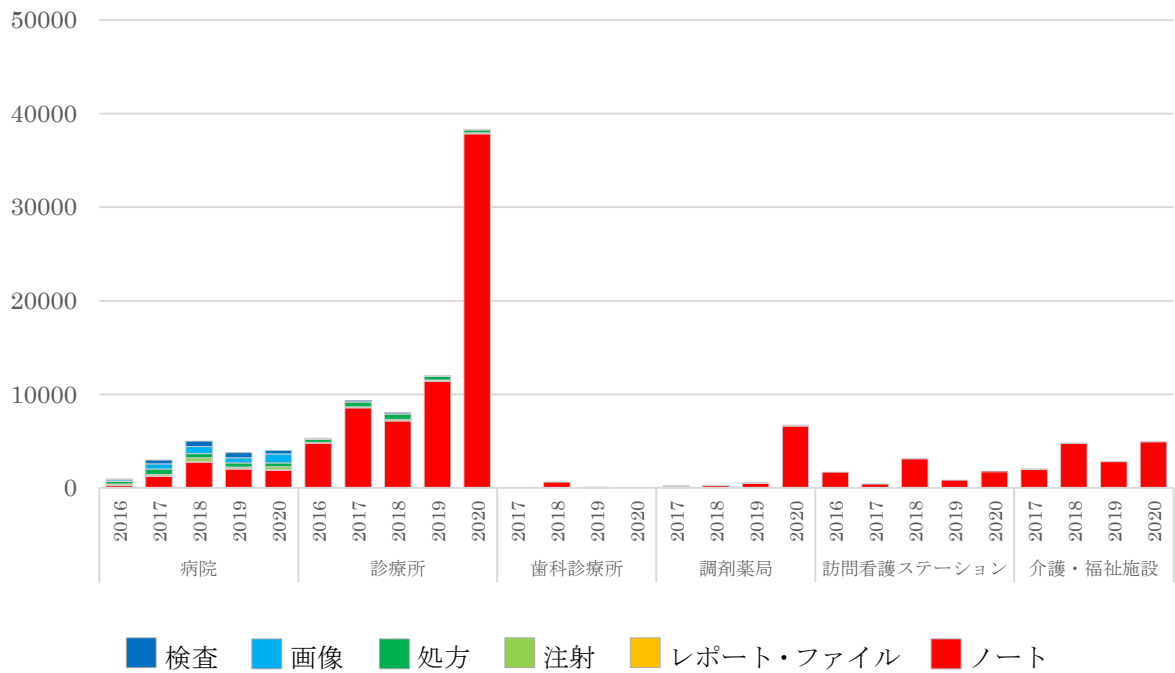
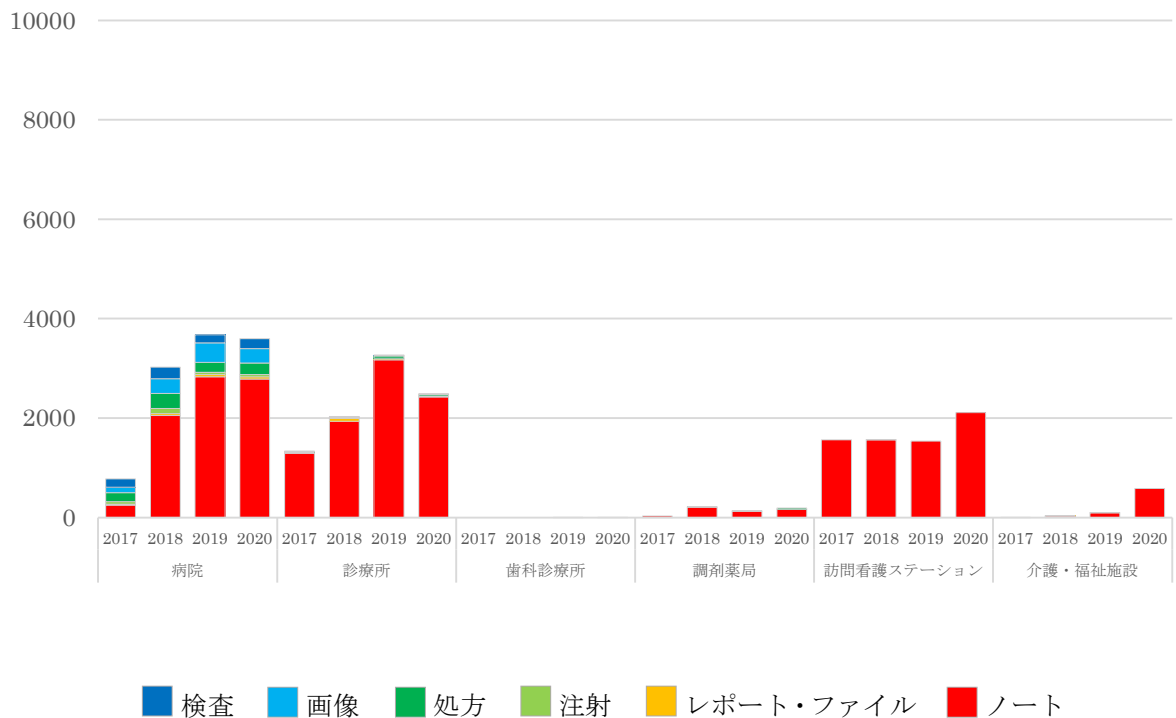


図 9 介護・福祉施設の参照先・参照項目



アクセスログの解析結果

(1) アクセス件数の年次推移

2014年に開催された「飯田下伊那診療情報連携システム[ism-Link] ID-Link 勉強会」を契機にアクセス件数は増加した。2017年から2019年は70,000台で横ばいとなっていたが、2020年度は120,000台にアクセス件数が大幅に増えた。

病院と診療所での利用は、2015年以降横ばいであるが、調剤薬局、訪問看護ステーション、介護・福祉施設では増加傾向で、特に訪問看護ステーションでのアクセス件数の増加が目立つ。(図1)

2017年までは利用するのは医師が60%以上であったが、同年に南信州在宅医療・介護連携推進協議会において多職種の参加が承認されことにより、2020年には医師以外の職種の参照が70%となっている。(図2)

項目別ではノートの参照が60~75%を占めているが、医療情報(検査・画像・処方等)へのアクセス件数も増えており、その中では画像の参照が最も多い。(図3)

(2) 施設別のアクセス状況の解析

病院の総アクセス数は2015年以降増減を繰り返しているが、これは年によって、診療所と訪問看護ステーションのノートの参照数に増減があるためである。病病間の医療情報(特に画像)の参照は着実に増えており、病院では、ism-Linkは医療機関間の診療情報の共有のための手段の一つとして定着している。(図4)

診療所では主に病院の医療情報の参照に利用されている。また、在宅医療を積極的に行っている診療所では多職種(特に訪問看護)との連携のため利用されている。(図5)

歯科診療所ではism-Linkの利用は進んでいない。(図6)

調剤薬局では特に病院、診療所との間のコミュニケーションの手段として利用されつつあり、病院の医療情報の参照もされるようになってきた(図7)

訪問看護ステーションは診療所との連携での利用が主体であり、2020年は特に診療所のノートの参照数が多かった。また、ケアマネージャーとの情報共有でも利用されるようになっている。(図8)

介護・福祉施設では病院・診療所・訪問看護ステーションのノートの参照に利用されている。介護・福祉施設内では、ケアマネージャーの利用が80%となっている。(図9)

ism-Linkは医療機関間での医療情報の共有、在宅医療での多職種連携のための「情報インフラ」として定着し、利用が進んでいる。